

牧野源泉先生の思い出

The Memory of Professor Motomi Makino

入谷 純
Iritani, Jun

牧野源泉先生は平成 19 年 11 月 25 日に 61 才にてご逝去された。あまりにも早いお別れであった。先生と初めてお会いしたのは昭和 47 年に和歌山大学経済学部に着任なさったころであった。先生はそれまで大阪大学の大学院生で、財政学を専攻なさっていた。当時、経済学部は和歌山市内の関戸高松のキャンパスにあり、先生はプールの北側に立つ木造の研究棟の 1 階に研究室を持っていた。長身で、ひょうひょうとされた先生の風貌からは、先生が大学時代に柔道部の猛者であったということはいささかも感じられなかった。大変に優しい気遣いをなさる、学生思いの先生であった。ゆったりとした独特のイントネーションでのお話しぶりが今も目に浮かび、そして耳に響いてくる。

今回、先生の思い出をつづる機会を頂いた。先生をめぐり、先生を特徴づける様々なことを書きつづり、先生を偲びたい。

1. 先生と財政学

先生の着任当時の和歌山大学では「財政学」の講義はなされていたが、財政学の専門家はいらっしやらなかったと思う。しかも、財政学は大きな変化の時期にあって、新しい財政学の知識を持たれた牧野源泉先生の登場は、和歌山大学の学生にとって大きな刺激になるものであった。それまでの財政学はいわば、制度論に独自の理論付けをしようとするもので、「財政学は経済学ではない」という考えさえあったようだ。

当時の財政学は概念分類をすることや制度を精査するという伝統的なものか

ら、経済モデルによって政策や制度が何をもたらすかを検討する分野に変化する途上にあった。牧野先生は新しい財政学の考え方を持って、和歌山大学に着任なさった。牧野先生が持っておられたのは、「財政学は経済学の一分野である」という明快な主張で、経済分析をメインにおく当時の財政学の急速な発展を体现しておられた。

先生の着任に先立つ 1950 年代、60 年代には、経済の均衡存在、安定性、経済成長、という経済学のメインテーマがあった。競争均衡の存在証明が与えられ、均衡の局所的あるいは大域的安定性がどのようなものであるかが明らかにされた。成長理論では、二部門モデルが 1960 年以降になって盛んに議論されていた。さらに、公共財の理論がサミュエルソンの効率性条件の発見という画期的な事件（1954）から生成されつつあった。公共財や外部性への対処の仕方への理解が深まるにつれて、それが今日の公共経済学 Public Economics や環境経済学 Environmental Economics につながっていく。特に、公共財の供給にかんする議論は今日のメカニズムデザインでの主たる概念である操作不可能性 strategy proofness につながっていく。

先生が学生時代に過ごされた大阪大学には当時、森嶋通夫先生や二階堂副包先生をはじめきら星のような研究者がおられ、きわめて先端的な経済理論の研究がなされていた。また、財政学の木下和夫先生が中心となって、マスグレイヴの『財政理論—公共経済の研究—I, II, III』（有斐閣, 1961, 62 年）が翻訳され、財政学においても阪大は一大研究拠点であった。牧野先生は木下先生のもとで財政学を学ばれ、当時の経済学界の動向を目の当たりにして財政学の研究をなさってきた。このような時代の動きを敏感に感じとられて、先生の研究は、旧来の財政学の内容を最新の経済理論の俎上に乗せて再吟味するという方向に向かわれていたように思われる。更に、いくつかの教科書を著されているように従来からの財政学の線上にある解説もなさっておられる。

先生のご研究のいくつかを紹介したい。年代順に次の 5 つを選ばせていただいた。

- [1] 牧野源泉 (1980) 「社会資本の過大と過少」『経済理論』177号, 25-43.
- [2] 牧野源泉 (1987) 「公的年金と動学的所得分配」『経済理論』218号, 85-112.
- [3] 牧野源泉 (1990) 「一般消費税の動学的帰着」(吉田昇三先生傘寿記念論文集編纂委員会編『経済発展過程の研究』不二出版, 79-93 に所収)。
- [4] 牧野源泉 (1996) 「環境税の基礎理論」(木下和夫・金子宏監修『租税構造の理論と課題』税務経理協会, 第9章, 287-308 に所収)。
- [5] 牧野源泉 (2000) 「赤字公債の動学的帰着」『経済理論』295号, 21-38.

[1], [2], [3], [5] は成長理論の上で財政学の諸問題を考察しようとするものである。いずれも堅実な準備と明快な目的を持ち、明澄な推論を積み上げた学術論文である。[4] は税務経理協会が「21世紀を支える税制の論理」として出版した7巻シリーズの第1巻に掲載されたものである。

[1] は先生の理論計量経済学会(現日本経済学会)での報告論文である。社会資本, 民間資本, そして労働力を視野に入れた一部門成長モデルである。社会資本が過大あるいは過少であるかの問題は, 従来社会資本の割引率の観点から議論されることが多かったと思う。先生はここでは, 一部門の均斉成長経路を考察するという問題を設定なさっている。モデルの特徴は, (1) 社会資本は生産と家計の両者に便益を与えるのに対して民間資本は生産にのみ寄与する, (2) 社会資本がリンダールの市場で財源調達される, と想定することである。そこで得られた結論は次の二つである。(a) 絶対水準においては, 民間資本は過大であり, 社会資本が過大(過少)であるかは, 民間資本と社会資本が補完的(代替的)であるかに依存する。(b) 相対水準においては, 社会資本は民間資本に比して過少である。以上の2点を導いておられる。

[2], [3], [5] ではテーマはそれぞれ異なるが, ライフサイクルモデルが採用されている。この分野における共通の知識「ある制度が資本蓄積を阻害するならば, 将来世代の厚生を低下させる」があり, これによって世代間の効果はほぼ解

明されているというのが先生のお考えであった。解決すべきものは「世代内の所得分配が如何になるか」であると考えられていた。そのためには、世代内の所得が異なりうる設定を構築する必要がある。先生の着想は所得獲得能力の分布関数を導入することであった。 a 円の所得を獲得する人が全体の $g(a)$ だけ分布していると想定なされた。分析の結果、「資本の減少程度が大きくなれば低い所得の階層が被る損失は、高い所得層と比較して、大きくなる」という性質がほぼ共通して成立することを示されている。これらで提示されたモデルが様々な状況に適用できる有力な設定であることが判る。

[2] と [3] では公的年金を、[5] では赤字公債を取り上げている。[2] が執筆された 1987 年の時点では、学界の中には年金制度が実質的に賦課方式になっていることについて危惧する声があったものの、それを大きな問題としてとらえる世論がまだなかった。[3] では、年金財源を一般消費税に求めた設定を採用なされている。1990 年は消費税の導入直前の時点で、その税収を年金財源にするという想定は現時点で見ても極めてタイムリーである。先生がこれらの問題をこれらの時点で取り上げていらっしゃるの極めて興味深い。[5] で先生は赤字公債を検討されている。この論文は先生が日本財政学会関西部会で平成 7 年に報告されたものである。私はたまたま先生の報告を拝聴する機会に恵まれ、先生の着想に驚いた記憶がある。

[4] は先生のご研究の線上としては私には珍しい解説的著作に感じられる。丁寧で着実な解説をなされている。論理の流れが明澄で、流れに飛躍がなく理解しやすすい名著である。[4] 以外にも、「公共支出論」（大阪大学財政研究会編『現代財政』創文社、昭和 60 年、137-166）や「地方支出の理論」（橋本・牛嶋・米原・本間編著『地方財政』有斐閣、1991 年、19-42）等の教育的配慮の行き届いた著作があるので、「珍しい」という印象は私に限られたことかもしれない。

2. 先生と私

先生と私との思い出を書いていくことで、先生を偲びたい。

学生時代の思い出の最大のもは、私のつたない論文にびっしり赤鉛筆の書き込みを入れて、文章を正して下さったことである。これほどの熱意で論文に手を入れてくださるとは、想像もしていなかったので、私はただただ感謝し有り難く思った。私は自分の書いたものが読みやすく上手な文章であると、何の理由もなく思いこんでいた。若い頃の思い上がりである。先生は、その思い上がりをやんわりと指摘して下さった。学問的な文章がどのようなものでなければならぬかの指導を受けた最初の経験であった。

また、大阪大学に筆者を連れて行って下さって当時の大阪大学の財政学の研究者に紹介して下さいたこともある。大阪大学には学術専門誌でしか知る事なかった高名な学者がおられた。また、かの大学は巨大なキャンパスを持つ複合体であった。一方、当時の和歌山大学は校舎が一カ所に集まっておらず、小さな単科大学のような雰囲気もあった。それに慣れていた私は圧倒され、先生に頼りきりであった。あのころ私はミクロ経済理論を研究テーマとして選ぼうとしていたが、その堅牢で壮大な理論構成にとまどいを感じ、自身が何かを貢献できるかどうか疑問を感じていた時期であった。そのときに、理論に拘泥せず理論を応用しながらなおかつ魅力ある分野、財政学、があることをお教えいただいたのはまさしく牧野先生からであった。先生は、筆者にとって財政学への先導者であった。私は、この点で、まさしく先生の弟子である。

先生は、いつの時点からか私のことを「入谷君」とお呼びにならなくなった。私が学生の頃、現東北学院大学教授の高橋秀悦氏、現京都学園大学教授の尾崎タイヨ氏、現大阪産業大学教授の勝田正広氏らと悪童ぶりを発揮している頃は、たしかに先生は「入谷君」と呼ばれていた。その後、私が教職に就いた頃から、私の学生時代とは一線を画するというお気持ちからか、先生は「入谷さん」と呼ばれるようになった。先生から「さん」を付けて呼ばれると、何やらヘンテコな気分になり、先生にその呼び方は止めてくれるようお願いした。しかし、先生はそれに応えられず、継続的に「入谷さん」と呼ばれた。一人前の学者として対等に接したいという、真っ直ぐなお気持ちであったのだろう。これが先生

の学生に対する首尾一貫した態度であった。

10年ほど前、財政学関係の学会で先生にお会いしたことがある。先生と夕食をご一緒した。経済学や財政学の問題のみならず、日本の経済状態についても大いに語り合った。そして二人して大いに飲んでしまった。お酒を頂いて、先生が酔われることはあまり記憶にない。そのときも、先生は気配りをなさりながら、淡々と会話を進めていらっしやった。食事が終わって勘定を済ませて、お店を出たときに先生は「入谷さん、僕払ろうたかな？」と聴かれた。瞬間、先生酔われたかな、と感じたが、「もちろん払っていただきました」とお返事した。先生はホテルまでタクシーを利用なさったが、タクシーに乗られるときにも「入谷さん、僕払ろうたかな？」と再度聴かれた。そのときに、先生も酔うことがあるのだと理解した。その次の朝にお会いした時、先生は3度目の同じ質問をなさった。律儀な先生に感嘆したものの、とっさに私は、「いいえ、先生まだ頂いていません、5万円でした」と答えてしまった。大嘘である。先生は目を丸くなさって財布を出そうとなさるので、あわてて、「嘘です、頂いています」と訂正した。先生が酔われていたことを告げると、「僕があれくらいで酔うかな？」とおっしゃった。記憶力のない私にも鮮明な記憶となっている。

実は、牧野先生は大変高い記憶力をお持ちだった。これに同意なさる方は多くいらっしゃるのではないだろうか。会話をしたことで当方が申し上げたことは全部覚えておられた。申し上げた当方に記憶がなくなったり、曖昧になったものも、先生は正確に覚えていらっしやった。私が大阪大学大学院に進学したあとで、当時阪大の助手をなさっていた本間正明先生を含む先生方が和歌山にいらっしやったことがある。その折りに、和太と阪大の二カ所に縁のある私が宿泊場所のお世話をしたらしい。「らしい」と書いているのは、私には全くその記憶が欠落しているからである。記憶にないものは存在しないのと同然なのは判っていただけるだろうか。2005年になって、牧野先生から「ほら、本間さんが和歌山に来たことがあろう、その時に…」とお聞きして、私は唖然としたのである。先生が話し始められたことはそれよりほぼ30年前のことであった。先生

は、その折りに、「あんたが、宿泊の世話をしたんじゃないろう」と私が覚えてないことに驚かれた。その以前にも、私が先生に愚痴を申し上げたことがある。私の愚かな行為の一つである。先生は私の申し上げたことを言葉通りに覚えておられた。気にしていただいていたのだろうか、やはり、2005年に「あれはどうなったかな」とお聞きになった。これはかろうじて思い出すことができたが、やはり、背に冷や汗を感じた瞬間であった。それにしても、先生、記憶が良すぎます。

牧野先生と学者としてのお付き合いが始まってから、私が指導にかかわった大学院生の学会報告に討論者のお願いを先生にしたことがある。そのうちの2例をとりあげて、紹介したい。故池田尚司帝塚山大学教授（2008年10月ご逝去）は大学院生時代から租税帰着問題を研究テーマに選んでいた。彼は修士論文の成果を理論計量経済学会で報告した。若い方の報告には、攻撃的あるいは自己主張の強い方は学会の討論者に必ずしも適切ではないだろう。若い方の成長の芽や可能性を摘んでしまうかも知れないからである。視野が広く、アイデアそして発展の方向や可能性を示唆していただける研究者が学会の討論者として適切である。そして、私には牧野先生に討論者をお引き受け頂くことがよいと思われた。先生はお引き受け下さった。後年になって、宮川敏治現大阪経済大学准教授が大学院時代に学会報告をするときにも、先生に討論者をお引き受けいただいた。

先生は学会のコメンターをなさるときには、大変緊張なさる傾向がおありになった。生来のお優しさと気遣いのためであろう。先生は汗だくになりながらも、お二人に極めて丁寧なコメントをなさった。モデルを展開するときには、通常、効用関数や生産関数を特定化せず、一般の形で表現する。そのため、若い方の論文には往々にして、仮定間に齟齬が発生することがある。先生はそれをよく知っていらっやって、この二つの報告に限らず、具体例を作って結果をフォローなさっていた。私はこのようなことをして下さる学会討論者をあまり知らない。また、若い方達には結果に過度な解釈を与える傾向もある。それにつ

いて、先生は極めて細やかな心遣いをなさり、やさしく指摘するに止められるのが常であった。

3. 2005年の先生

2005年の1月末に牧野先生より電話があった。和歌山大学の2005年度のミクロ経済学（通年科目）を非常勤で担当してくれないかというご依頼であった。年度末のその時点でまだ担当者が決まっていないことは、大変お困りだろうと思った。先生のおっしゃりようは、非常に率直で、すでに他に頼みようが無くなっていることが容易に推察できた。それで、後期金曜日の午後に集中していただくということでお引き受けした。後日、牧野先生は和大大で私がミクロ経済学を教えることを大変うれしいと言ってくださった。先生がそんなに喜んでくださることに、昔教えを受けた私は大変光栄に感じたものである。

和歌山市栄谷に後期から毎週通うことになった。経済学部が関戸高松にあった昔に比べると、建物や雰囲気などは大いに変わっていた。昔日には下駄を履いた学生が散見されたが、そのような風習は無くなってしまったようだ。茶保里（さぼり）という喫茶室が昔の松下会館にあったが、その名前を確認することができなかった。母校と言うにはあまりにも大きく違っており、見知らぬ大学に来たような気分であった。しかし、教室にはいる廊下にある大きな窓から、遠くに秋葉山を望み、近くに紀ノ川が流れるのを鳥瞰することができた。更に教室内からは西に海が眺望できるという素晴らしく和歌山的な教室であった。

何にましても和歌山的であったのは、私が学生時代に接することのできた諸先生、牧野源泉先生、三木田辰兵先生、山下謙蔵先生とお会いすることができ、学生時代に帰る気持ちとなったことである。お三人の先生は着任時点も近く、大変に仲良くしていらっしやうのように記憶している。随分に昔、入学試験前日に3人の先生方が入試にそなえてお集まりになった。そのときに牧野先生が畳の上で転んだことがあるそうだ。その下にたまたま山下先生が寝そべておられてその上に倒れこんだということである。入試の当日に山下先生は何故か

胸が苦しかったが、理由は判らなかつたという。これが山下先生のおっしゃる「源ちゃんのヒップドロップ」である。山下先生からは再度この話を伺い、昔話に花を咲かせた。三木田先生からは岡潔先生にかんする著作を頂いた。当時私は、加茂知幸京都産業大学准教授とともにアローの不可能性定理の代数的証明をほぼ完成させていた。その概要を先生に申し上げた。あまりに数学的な話であったためだろうか、三木田先生は「入谷君、準同型定理も良いけど、仏教もやりなさい」と諭された。

牧野先生とはほぼ毎週おしゃべりをした。先生の血圧が高いことをお聞きし、血圧のお話を随分したように記憶している。先生は長距離を走るランナーでいらっしゃったから、私はそんなに高い血圧は一時的なことだろうと感じた。医者に相談すべきだとおすすしめしながらも、先生に大事なだろうと安心していった。

そのときのミクロ経済学の講義には、牧野先生のゼミ生諸君が多く参加しておられた。その中では、大阪大学に進学した森本修平君、京都大学に進学した南正太郎君、神戸大学に進学した橋本つばささんが印象に残っている。他にも多くの方が記憶に残っているが、牧野先生のゼミ生に限ると彼らの印象が強い。牧野先生はこの3人の学生の将来についてご心配だったのだろう、その後何度も私に尋ねられた。彼らにミクロ経済学のおもしろさや魅力を伝えることができたとしたら、牧野先生のご期待に少しはお応えできたかと思う。現在、森本君は社会的選択理論を研究テーマに選んでいる。彼は、2008年6月にカナダのモントリオールで開かれた社会的選択理論の国際学会 International Meeting of Social Choice and Welfare で最新の成果を報告した。その詳細をこの紙面で解説することは控えたいが、その分野で解決することができないとされていた難問に解法を与えるという画期的な成果であった。「森本はどうなるかな」と心配なさっていた牧野先生がお聞きになれば、大いに喜んでくださったろう。

講義の最後の日に、牧野先生と夕食をご一緒した。先生は食事場所について私の希望を聴いて下さり、お城の西にあった「翁」という食堂を探して下さっ

た。タクシーの窓から見ると、お店は既になくなっており、店の看板代わりの翁面だけが壁面に残っていた。和歌山市駅前先生と食事をし、遅くまで飲んだ。その間に先生ご自身のことから、私の学生時代の話まで、色々な話をした。先生の記憶力は素晴らしかった。上にある先生の記憶力のエピソードはこの時のことである。帰りには南海電車に乗って先生は途中まで、私は電車を乗り継いで宝塚に帰宅した。この時が先生の生前のお姿を見た最後である。

私が担当したミクロ経済学の試験結果について、牧野先生は大変に気にして下さった。2006年2月26日に先生から頂いたメールには次のことが書かれている。

うーん。(-_-;) いろいろ工夫をして魅力的な授業をして下さったのに、学生の意識などレベルが低すぎて、申し訳ありませんでした。近年、特に、きちっとした議論をしようとする姿勢が欠落していることが気になります。表に出た結果はともかく、入谷さんの熱意に触れて感銘をうけ、(講義や配布資料を通して) 議論の仕方や考え方を学んだ学生がいることは間違いありません。失礼をしましたが、このあたりになにがしかの期待を持っています。

これが先生が私に下さった最後のお言葉となった。

先生が多大な影響をお与えになった者たちは、私も含めて、いつまでも感謝の念を忘れることはありません。先生、どうぞ安らかに眠り下さい。

牧野源泉先生の指導を受けた和歌山大学経済学部卒業生
(神戸大学大学院経済学研究科 教授)